

# af News

## 平成23年度(第20回)ブループラネット賞 表彰式典並びに祝賀パーティー

平成23年度(第20回)ブループラネット賞の表彰式典が平成23年11月9日、東京會館において開催されました。本年度の受賞者は、米国のジェーン・ルブチェンコ博士と、インドのベアフット・カレッジです。

ルブチェンコ博士は生物多様性を起点とした海洋生態学の開拓に大きく寄与し、また科学者の社会的責任の重要性を明瞭に世に示しました。ベアフット・カレッジは伝統的知識を重視した教育活動により途上国の農村地域住民を支援し、自立的な地域社会構築の模範を造り上げました。

表彰式典には秋篠宮同妃両殿下のご臨席を賜り、各国大使をはじめ、官界、政界、学界、経済界を代表する数多くのご来賓にお集まりいただきました。

地球という生命の惑星に生まれ、この星に生きたすべての命たちの願いをこめて紡ぎだす祈りの調べに耳を傾けるための一助となれば、との願いを込めた記念映像で開幕しました。

田中鐵二理事長の主催者挨拶に引き続き、林良博選考委員長より選考経過報告ならびに両受賞者の紹介がなされ、その後、理事長より両受賞者への贈賞が行われました。

秋篠宮殿下からお言葉を賜った後、野田佳彦内閣総理大臣のご祝辞が安達健祐経済産業事務次官から披露されました。受賞者の国を代表して、ジョン・V・ルース駐日米国大使からご祝辞が述べられ、アロック・プラサード駐日インド大使のご祝辞がチャダラム・シバジ参事官から披露されました。それぞれのご祝辞において、両受賞者の地球環境問題に対する熱意と業績が讃えられました。

式典に引き続いて行われた祝賀パーティーは、ご来賓の方々からの祝福で和やかな雰囲気になりました。ルブチェンコ博士とベアフット・カレッジ創設者のバンカー・ロイ氏の周りにはたくさんの方々が集い、優れた業績を讃える言葉が述べられました。



ブループラネット賞表彰式典にてお言葉を述べられる秋篠宮殿下



ジェーン・ルブチェンコ博士



ベアフット・カレッジ

# 自然に学び、自然の恵みを育み、持続可能な人として科学者として範を示し、成すべき事を

## 受賞の辞 — 抜粹 —

### ジェーン・ルブチェンコ博士



人々は大洋の広大さ、そして底知れぬ深さに気を取られて海の美しさと恵みを当然のものとして捉え、海と自分たちの未来を守ることを怠ってきました。

海で働き、海のそばに住む人々は、身近に起こっている海岸の劇的な変化を目の当たりにしています。でも変化はそれだけではありません。変化は地球規模で起こっています。魚の乱獲、生息地破壊、汚染、気候変動、海の酸性化は、相互に影響しあい、海洋の生態系を破壊しています。その結果、海洋資源は枯渇し、野生生物は危機に瀕し、海産物は汚染され、サンゴは白化し、海沿いの地域社会は脆弱化し、クラゲや有害な藻類、病原菌の大量発生を招くという状況が、あまりにも多くの地域で日常化しつつあります。

この枯渇と破壊は、食糧の安全保障、仕事、活力に満ちた地域社会や経済、豊かな野生生物、健康な市民、きれいな海辺、レクリエーションの機会、嵐や津波から陸地を守るといった、健全な海の生態系が人々に与える数え切れないほどの恵みを蝕み、あるいは途絶えさせているのです。問題の深刻さ、あるいはより持続可能な実践や方法を採用入れる実行可能な選択肢が他にあることを正しく理解している人が、あまりにも少ないのです。

幸いにも意識は高まりつつあり、解決方法も見出されつつあります。しかし、変化を実践する意志が立ち遅れているのです。自然科学や社会科学の進歩の上に築かれた確実な解決方法によって、各地域の関心や解決能力を高め、環境保全と経済的動機を両立させることができるのです。こうした解決方法には、全生態系に基づく計画と管理、禁漁の海洋保護区、科学および権利に基づく海洋資源管理、生息環境保護などがあります。しかし何よりもまず私たち人間は、海の恵みは有限であること、海の回復力はいつまでもは続かないこと、そして人間が制御できるのは自然ではなく、自らの行動のみであることを認識しなければなりません。海洋管理への取り組みが緊急に必要なのです。

私は一人の公僕として、解決方法を実践し、意識を高め、人々を賢明な決断に導く情報を提供するべく尽力しています。すべては科学に根ざすものです。また孫を持つひとりの人間として、私は未来の世代に健やかな青い地球を残したいと切望しています。地球社会全体が丸くなって、目的意識と切迫感と希望をもって問題に取り組むことによってのみ、私たちは、自分たちの青い地球のより持続可能な未来という目標を達成できるのです。

### ベアフット・カレッジ



ベアフット・カレッジを代表して、私たちは2011年度ブループラネット賞の受賞者に選ばれたことを非常に光栄に思います。また、当カレッジが日本で最も古い歴史と最も名誉ある環境賞に選ばれ、インドでこの賞を受賞した2

番目の組織となることができたのは、旭硝子財団の皆様のおかげであり、心から感謝申し上げます。

今日世界が直面している深刻な環境問題に対する答えはすべて、世界の田舎に住む貧しい人々が見つけていると私たちは信じています。旭硝子財団は、同カレッジの功績を認めることによって、伝統的知識、村のスキル、そして半世紀近く前にマハトマ・ガンジーが力強く実証した年長者の知恵を適用することが、今なお普遍的に重要であり、実際に緊急に見直す必要があることを明らかにしました。通常の学校教育以上に、世界中の町から遠く離れた村に見られる強力な、正規ではない教育形態から、私たちが学ぶことは多くあるのです。彼らはシンプルで持続可能な生き方を教え、今こそ実用的な低コストの解決法を適用する時であり、私たちはすべて、これを学び直すことができることを示しています。私たちが辛抱強く謙虚に、地方の貧しい人々に耳を傾け、シンプルな解決法がいかに今必要であるかを学ぶなら、まだ地球を救うことができます。

なぜ私たちは、貧しい人々の声に耳を傾けなくなったのでしょうか？ 私たちに時間さえあれば、彼らは土壌や水、空気を大切にし、私たちに残された、限られた資源を濫用しない方法をたくさん教えてくれます。

私は、「シンプルに生きなさい。そうすれば周りの人もシンプルに生きるだろう」というマハトマ・ガンジーの言葉を思い出します。

今こそ、地球の資源を、これまで十分に活用されていない、多くの知識とスキルを持つ、世界のシンプルな女性たちの手に戻す時なのです。「天の半分は女性が支える」という諺があります。

1日1ドル以下で暮らす世界の男性、女性、子どもたちを代表して、私たちは旭硝子財団からこの素晴らしい賞をいただき、嬉しく思います。

ブループラネット賞は、実用的な知識の膨大な宝庫に対し、それに値する敬意と尊厳を与えてくれました。本当に感謝しています。





## 贈賞理由紹介 林良博選考委員長

### ジェーン・ルブチェンコ博士

博士は1991年に出版された「持続可能な生物圏イニシアチブ」で、世界各国の政府に、絶滅危惧種を救い、生物多様性を維持・促進する努力を強く求めました。1997年には「科学者の社会契約」という題目の論文を発表し、科学者の社会的責任として「科学者は全力で新しい科学的発見を成し、それを社会と為政者に伝えることで、人間社会の持続可能な生物圏への移行を助けるべきである」として、世に大変大きな影響を与えられました。博士は、環境問題の解決は人類共通の重要課題であり、狭い党派的な考えから論ずべきではないと考え、生態学の理論や知見を、環境保全に向けた社会政策へ具現化させ、常に社会に貢献して行くことに注力し、科学者と社会の間にあるギャップを埋めるための中心的存在として活躍されています。



### ベアフット・カレッジ

同カレッジは農村社会の様々な問題に対する伝統的知識を重視し、住民自身による対処を主体とした生活改善策を提供してきました。この改善策は、ソーラーエネルギー、水、教育、ヘルスケア、農村地域の手工芸、コミュニケーション、女性のエンパワーメント、および荒地開発と広範にわたり、幾多の改善の実績を挙げてきました。彼らが用いてきたのは、「シンプルであること」と「学ぶこと／学び直すこと」で、これにより人々が容易に且つ柔軟に生活改善に必要な知識や技術を学び、また何度も学び直すことを認め失敗を恐れない学びの環境を造ることができました。同カレッジのシステムは、今ではインド(17州)から、アフリカ(15ヶ国)、アジア(2ヶ国)、南米(1ヶ国)にまで広がりを見せ、確かな潮流を形成しつつあります。

## ジェーン・ルブチェンコ博士



コロラド大学へ入学  
海洋生態学を専攻



1988年  
オレゴン州立大学で、海洋生物の環境順応について研究



1992年  
米国生態学会会長に就任し、海洋保護区の確立を提唱



2009年  
女性初の米国海洋気象局長に就任



ご主人とともに

1991年  
「持続可能な生物圏イニシアチブ」を発表



## ベアフット・カレッジ



1972年  
放棄されていた結核療養所施設を政府から借りて Social Work Research Center を設立

1986年  
6年がかりで新キャンパスを完成、組織をベアフット・カレッジと改称



太陽光発電機器の組立、修理、管理を担うソーラー・エンジニアを養成

最重要課題である水の確保のためにポンプ職人を養成、数千基のポンプを設置



インド17州で約1500の雨水貯槽タンクや、灌漑用ダムを建設



創設者バンカー・ロイ氏とベアフットカレッジの方々

## ブループラネット賞 受賞者記念講演会

11月10日に国際連合大学ウ・タント国際会議場において、受賞者の記念講演会が開催されました。320名を超える方々が参加し、満席となる盛況でした。第1部ではルブチェンコ博士の講演と、科学技術振興機構研究開発戦略センターの吉川弘之センター長のコーディネートによる質疑応答、第2部ではベアフト・カレッジ創設者のバンカー・ロイ氏の講演と金沢大学環境保全センターの鈴木克徳教授のコーディネートによる



質疑応答が行われました。コーディネーターの巧みな対話と進行によって、会場の参加者からも多くの質問が寄

せられ、中身の濃い活発な質疑応答が展開されました。受賞者の方々の業績に対する理解が深まると共に、私たちの行動の指針を学ぶ貴重な機会となり、充実した4時間を過ごすことができました。なお、当日の配布資料および講演の様子は、当財団ホームページからご覧いただけます。



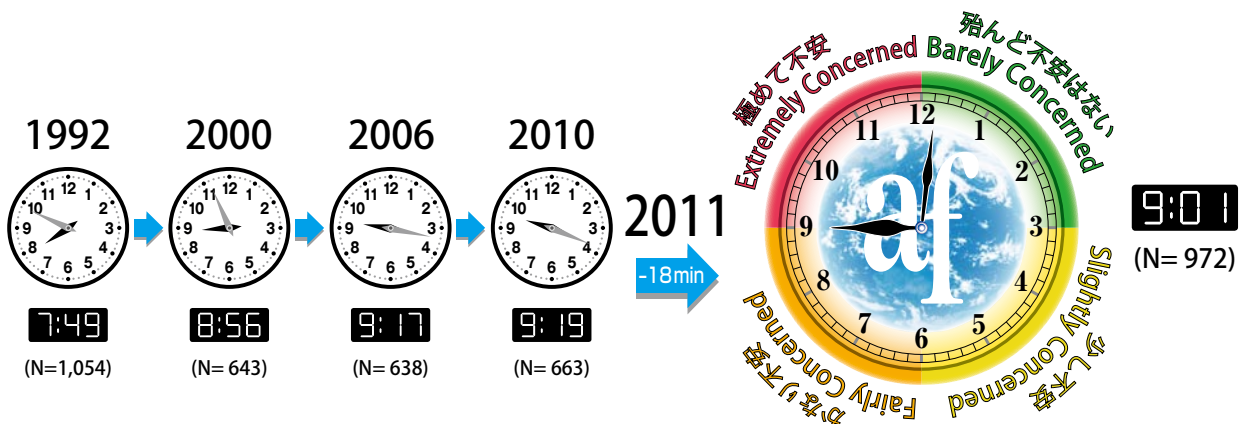
### —— 環境問題に携わる世界の有識者の認識 ——

#### 第20回「地球環境問題と人類の存続に関するアンケート」調査結果

当財団では、環境問題に携わる世界の有識者を対象に、環境問題に対する様々な取り組みに関する意識調査を1992年以来継続して行っています。地球環境を保全するにはグローバルな対策が不可欠であり、世界の人々が環境問題解決に向け共通の認識を深め、協調関係をはぐくむことが重要と考えているからです。2011年4月～6月に実施した調査の中から「環境危機時計<sup>®</sup>」について報告します。調査結果はホームページ (<http://www.af-info.or.jp/>) にも掲載しておりますので、ぜひご参照ください。なお、調査票や報告書作成にあたっては、地球環境戦略研究機関特別研究顧問で当財団理事の森島昭夫先生に監修していただきました。(アンケート回収数 1,000 (うち国内 468, 海外 532), 回収率 14%)

#### ❖ 人類存続の危機に対する認識「環境危機時計<sup>®</sup>」❖

2011年の全回答者平均の環境危機時刻は9時1分となり、昨年と比べて針は18分戻り、この戻り幅は調査開始以来最大、3年連続で危機感が弱まる結果となりました。日本は前年に比べて針が23分戻り8時46分(全地域の中で危機感が最も弱い)、海外合計は13分戻り9時14分でした。





## 助成研究便り

現在進められている助成研究の中から、ユニークな大型プロジェクトをご紹介します

### 2010年度採択 課題連携研究

課題名：葉の形態および分光特性に基づく植物種同定支援システムの構築  
 助成金受領者：九州大学 大学院理学研究院生物科学部門助教 松田 修 ほか2名  
 (助成総額 2,300 万円, 助成期間 3 年間)



温暖化をはじめとする地球規模の環境変動が顕在化する中、人間生活の豊かさを支える多様な生物圏を維持することの重要性が強く訴えられています。しかし、その保全活動に実質的に貢献することは、一般市民にとって必ずしも容易なことではありません。第一に、生物多様性に関する情報を広く市民から収集し、知識化していくための効率的な仕組みが整備されていません。第二に、有用な情報を提供するためにも、生物種を正しく見分けるための高度な知識と経験が必要です。本研究では、身近な自然を慈しむ市民の自発的な想いを、生物多様性の保全に実質的に結び付けていくための仕組みづくりを目指しています。具体的には、急速に普及が進んでいる携帯端末と高速データ通信網を活用し、画像情報などを手がかりに、生物種名を迅速に検索することのできるシステムを提供します。また、利用者による生物種の検索結果を、日時・位置情報とともに履歴化することにより、生物多様性の現状、すなわち「いつ・どこに・どのような生物種が」実在したかを時系列的に把握するのに役立っています。人間と自然が真に共存できる社会の実現に向けて、その一助となる活動に努めてまいりたいと思います。



スマートフォンを用いた  
 生物多様性情報の収集システム



葉の形質に基づく種同定支援に  
 向けた特徴データベース

### 2011年度採択 若手継続グラント

課題名：コーハウジングにおける環境情報表示システムの開発  
 助成金受領者：工学院大学 建築学部まちづくり学科准教授 中島 裕輔  
 (助成総額 600 万円, 助成期間 3 年間)



近年、温暖化対策として、家庭でもより一層の省エネ・節電が求められています。そのような中で、電気の無駄使いや製品ごとの消費電力が分かる「電力の見える化」ツールが注目され、家電を自動制御するシステムも出てきています。これに対して私は、家電よりもまずは快適で省エネな家づくりと、その家を賢く居住者が使いこなせることが重要と考え、先行研究では住宅を取り巻く環境や消費エネルギーを分かりやすく表示し、適切な省エネアドバイスを提供するシステムを試作して賃貸アパートに設置しました。この実験で一定の省エネ効果は得られましたが、ひとつの家庭の中だけの使用では気付きや省エネ効果に限界があることもわかりました。一方、安全・安心の観点からも住民のコミュニティ再構築が見直され、欧米で実績のあるコーハウジング(リビングやキッチンなど充実した共用部を備え、空間や設備をシェアする住まい方の共同住宅、コレクティブハウスやシェアハウスとも呼ばれる)



先行研究で製作した環境情報表示システム EcoLIVES



「環境の見える化の共有」システムを導入するコーハウジング

も増えつつあります。本研究ではこれらを組み合わせ、実際のコーハウジングにおいて「環境の見える化」を『共有』するシステムを導入し、住民同士の情報の交換、共有、時には比較を通して、単一住戸で取り組む以上の省エネルギー・快適性向上に向けた効果をえられる仕掛けを構築したいと考えています。

# 東北大学と筑波大学への震災復興支援金贈呈



走査型  
電子顕微鏡



CAD 設計用ならびに造形装置操作用のコンピュータとソフトウェア一式

旭硝子財団では、3月11日に起きた東日本大震災により被災した当財団研究助成先の先生方、ならびに最も設備の被害が深刻であった国立大学法人東北大学に対して、震災復興支援金総計 2,800 万円を贈呈しました(6・9月に振込みを完了しました)。

その内訳は、東北大学所属の助成先の先生方 18 名に合計 750 万円(うち 1 名 20 万円は転出先の順天堂大学へ)、筑波大学所属の助成先の先生方 3 名に 50 万円、東北大学創造工学センターに 2,000 万円(写真参照)です。

## 『生存の条件』 韓国語版が刊行されました



旭硝子財団では 2010 年に『生存の条件』の日本語版・英語版を刊行しました。この本は世界各国で好評を博し、海外の協力者によりさまざまな言語への翻訳が進められています。2011 年は 3 月の中国語(簡体字)版の刊行に続いて、9 月には韓国語版が刊行されました。その詳細は下記の通りです。

◆ 出版社

Environment & Landscape Architecture of Korea

◆ 翻訳者

盧隆熙(ノ・ユンヒ) ソウル大学環境大学院名誉教授

今後、アラビア語版・フランス語版の刊行も予定しています。

## 公益財団法人 旭硝子財団

〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ 2 階  
TEL (03) 5275-0620 FAX (03) 5275-0871

URL <http://www.af-info.or.jp>

E-MAIL [post@af-info.or.jp](mailto:post@af-info.or.jp)